

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念である「自分らしい時を過ごす場所」を事務所の目立つ場所に掲げ職員が出勤の都度見られるようにすることで、各職員が常に意識をもって業務に臨めるようにしている。	法人の理念は日頃から当然のこととして認識してケアしており、出勤、退社時には事務所に掲げられている理念を見て常に思い返している。新任の職員には入職した際に代表者から話しをしている。理念の通りに利用者が自分らしく過ごしていると職員も感じている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元自治会の行事に参加したり、どんど焼きを行う場所を提供し、利用者も参加できるようにしている。	地元自治会の清掃活動に参加したり、ホームの敷地をどんど焼きの場所として提供したりしている。どんど焼き当日はホームのキッチンを開放しトン汁づくりを皆で行い、点火された炎をみて利用者も手を叩いて一緒に楽しんだという。近所の方から野菜を頂いたりすることもある。ホームは地域の方にも浸透してきており、「評判いいよ」、「絆さんに入りたい」等の言葉を頂き、今後も気を引き締めて日々よいケアをしていきたいと職員も決意を新たにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自社のホームページにより相談を受け付ける告知をし地域の認知症の方々やご家族の相談窓口となっており何件かの相談に応じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回定期的に活動状況や施設の状況等を報告し、構成員の方から意見をいただきサービス向上に活かしている。	メンバーは利用者、家族、区長、常会総代、自治会長、町社会福祉協議会職員、町職員等で、2か月に1回開催している。内容は利用状況や事業の報告をし、メンバーからケアの方法や避難訓練の状況等の質問や意見をいただいている。家族代表から感染予防への対応や日頃のケアについての感謝の言葉と絆だよりの内容が良かった等の感想を伝えていただいたこともあったという。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	自治体の介護予防事業の委託を受けている関係もあり、町担当者と連絡を密にとっている。また、町の生活支援サービス協議体会議に参加している。	自治体が主催する生活支援サービス協議体の会議で今後の課題である総合支援事業の在り方について話し合っている。町の介護予防事業の委託を受け、「お元気クラブ」として週1回実施し、地域の75歳以上の高齢者の自立生活支援に尽力している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の施錠は行っておらず本人の意思で出入りできる。但し防犯と安全上の面から夜間と休日のみやむを得ず行っている。それ以外の身体拘束を行わないケアに関しては職員に研修を行い周知徹底している。	平日、玄関は開錠しており利用者は自分の意思で出入りできる。他の利用者の行動からプライバシーを守るため、場合により居室を空けるときに施錠する場合もあるが、家族に説明し同意を得て、カンファレンスで話し合っている。転落のリスクがある方には横にベットを並べ安全を確保している。職員は定期的に研修を受け拘束のないケアに取り組んでいる。	

グループホーム絆

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	行事終了後などの時間を利用して、職員間の話し合いの際に時間を設け、随時学ぶ機会をもち日常的に身体の状態を観察するようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	行事終了後などの時間を利用して、職員間の話し合いの際に時間を設け、随時学ぶ機会をとっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に契約書をご覧になっていただきつつ、疑問点等お伺いしそれに応えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	受付にご家族からの意見や提案を記入できるノートを設置している。また、苦情解決担当者を設け、面会等の機会の際ご要望等伺っている。場合によってはご自宅を訪問し、要望を伺うこともある。	利用者には日頃から思いを聴きながらできるだけ応えるようにしている。家族の来訪時には利用者の状況を伝え意見・要望を聴くようにしている。家族には毎月の絆だよりと写真集で行事や日頃の様子を伝えている。利用者のケアについて家族と相談するため自宅を訪問することもある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	意見や提案などを記入するノートを作製し、活用したり定期的に職員同士でミーティングを行う機会を設け、職員からの意見や提案を常に聞けるようにしている。	月に1回ミーティングを行ないケア内容について意見を出し合っている。キャリアパスを基に年間研修計画が立てられ、職員は意欲的に外部研修に参加している。また実践スキル評価制度やメンタルヘルス制度を実践しており、職員は定期的に代表者と面接をし、課題や希望を伝え話し合っている。日頃から代表者や管理者は職員とのコミュニケーションをとり、研修に関する情報提供や身体に負担がかからないように設備を整えたり、職員の声をできるだけ取り入れ少しでも働きやすい環境作りをしたいと考えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	今年度から、評価処遇制度、研修体系制度、健康づくり制度を制定し、より良い就業環境となるようにした。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修体系制度により、年間の研修計画を立て、職員のスキルに応じた研修を受講できるようにした。尚、交通費を含む費用は全額法人負担としている。		

グループホーム絆

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	関連団体(長野県宅老所・グループホーム連絡会等)主催の研修会や交流会に積極的に参加している。また、町の生活支援サービス協議体会議へ参加することにより、他事業所との交流をはかっている。			
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前にご本人と面会しお話を伺い、そこから得られた情報を整理し、基本情報に盛り込みそれを職員間で共有し、ケアに反映できるように努めている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前にご家族と面会しお話を伺い、そこから得られた情報を整理し、基本情報に盛り込みそれを職員間で共有し、ケアに反映できるように努めている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期に得た情報をもとにアセスメントしケアプランを策定している。また、入居後しばらくして本人の特性等つかめたところで再度アセスメントし、認知症スケール(HDS-R)も活用して、ケアプランを見直すようにしている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の正面から近づき目線の高さを合わせ、体に触れながら声掛けをし、全てにおいて本人の意思を尊重して行うようにしている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者様の日頃の様子を掲載した『絆だより』を発行し郵送したり、あえて衛生用品を届けていただき、面会の機会を多くもてるようにしている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人がこれまでに過ごされてきた地区のお祭り等の行事に参加することができるよう企画している。また、本人の状態をみつつ、家族等と外出や外泊できるよう支援している。	友人・親戚の来訪や手紙の支援等を日常的に行っている。公衆電話が入り口に設置されているので利用者は自由に使える。家族とお墓参りや法事に出かける方もいる。元旦は馴染みの職員と一緒に地域の神社に初詣に出掛けたり、正月料理を食べたりして正月気分を味わっていただいているという。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	リビングを快適に過ごせる環境にし、ほとんどの入居者様が1日の大半をリビングで過ごされるように工夫している。強制ではないが、気の合う人同士を同じテーブルになるよう誘導している。			

グループホーム絆

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も定期的に連絡をしその後の様子等を伺うようにし、必要に応じて援助できるよう心がけている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	基本的な一日のスケジュールはあるが全てにおいて本人の意思に従っている。入浴は毎日できるようにしている。必要に応じて本人の希望等記録に残し、定期的に重要な項目に蛍光ペンでチェックし、ケアプラン見直しの際など参考にしている。	利用者の意向を汲み取り実現できるように努めている。時には本人の思いを伝え家族の協力を得られるよう自宅を訪問することもある。ある時、意向が伝わらず混乱していた利用者に、疾病のことやグループホームで生活する目的などをしっかり時間をかけて説明すると納得していただき、以後、混乱することが少なくなったという。職員は常に本人本意に考え対応している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人の生活歴や趣味、呼び名及び生活環境や入居までの経過等を事前に本人や家族から聞き、日頃のケアに活かしている。また、家人や知人の面会時や普段の本人との交流のなかで得た情報をまとめ、基本情報に盛り込むよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	暮らしのなかで何ができるか、状態チェックシートを活用し、心身の状態はどうであるかを、常に観察し見極め、一人一人に合った支援や環境の整備をしている。また、平常の血圧値を把握するため、1週間ごとの血圧の平均をだすようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族、医療機関や前ケアマネ等からの情報や意見を基に職員と相談しできる限り自分らしく暮らせるようなケアプランにするよう努めている。	本人や家族の意向を踏まえてケアマネージャーが介護計画を作成し、毎月のカンファレンスで日々の記録を基にモニタリングし話し合っている。6か月で見直し、利用者の望む暮らしを取り入れるようにしている。いくつかのアセスメントシートを使用し、利用者それぞれの背景を理解しチームケアを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や気づいたことを記録に残し、特に重要なものは日誌に別に記入し、申送り情報で共有している。また、特に重要な事項に関しては随時職員間でミーティングを行い、よりよいケアが実践できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	自宅や病院等への送迎や付き添いは原則的には家族にお願いしているが本人や家族の状況や要望に応じて職員が行っている。		

グループホーム絆

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	日常は花や野菜の栽培、自然に恵まれた環境の中での散歩、季節ごとに花見や紅葉狩りなどの計画を立て「旅のしおり」を予め配ったりしている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は全て本人や家族が希望する医療機関で行っている。職員が付き添い受診し、日頃の様子等を医師に伝えるようにしている。	本人や家族の希望によりかかりつけ医を協力医である町立病院にしている利用者が多いが、以前からのかかりつけ医を継続している利用者もいる。職員が付き添い受診する場合は口頭で生活状況等を医師に伝え、家族が付き添う場合にも必ず書面で伝え適切な医療を受けられるよう支援している。町立病院の地域連携室と連携をとっており、緊急時に相談したり、必要があれば訪問診療や訪問リハビリも可能である。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	町立病院の地域連携室と連携をとっている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時、本人の生活習慣やケア上の情報を担当看護師に情報伝達し、入院中はこまめに面会し状況把握に努めている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	まずは、契約時に事業所のできることを説明し、本人・家族の意向を確認し対応できるようにしている。	契約時に重度化や終末期のケアについてホームのできることを説明しており署名も頂いている。今年度、職員の看取りケアに関する外部研修を計画していたが外部研修がなかったため実施できず、引き続きホームの課題として、来年度は研修や利用者の希望に沿える体制づくりについて検討していく予定である。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時に備えAEDを設置している。また、応急手当普及員の資格を持った職員が全職員に対し救急救命法等の講習を行っている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	当グループホームの避難マニュアルを作成し、それに基づき定期的に事業所内で避難訓練を行っている。また、被災時には地域の認知症のかたを中心に当ホームで受け入れるようにしている。自治会との合同の防災訓練を計画している。	2か月に1回、ホーム独自に避難訓練を実施している。夜間想定で自宅から職員が駆けつける等、実際の災害時のように訓練・反省を繰り返して行い有事に備えている。利用者はホーム所有の大型福祉車両に避難することになっており、いかなる災害でも使用でき、安全に避難することができる。		

グループホーム絆

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は施設が一人一人の住まいであることを常に頭に入れて接するようにしている。声掛けの際は必ず「いかがですか？」と伺うようにするなど、本人の意思決定を尊重できるよう配慮している。	人として当たり前のことを当たり前にやる、という意識でケアしている。呼び方は家族に今までの呼び名を聞き、本人の了承のもと尊厳を保ちながらお呼びしている。入浴の際の更衣などプライバシーを守る配慮もしている。認知症ケアにおいて、特に入浴や排泄の支援は利用者の誇りや尊厳を守ることが重要と考え、ケア技術の研修やホーム内の文献等でも学習している。利用者と同じ目線でさりげない優しい言葉かけをしながら支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食事、入浴、排泄等の日常生活の場面における言葉掛けの際、常に本人に選択できるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事は希望する時間に提供し、居室でもとれるようにしている。入浴は毎日可能とし、夜間でも入れるようにしている。また、職員には職員の都合でケアしないよう指導している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で行えない人に対しては毎朝職員が本人の意見を聞き支援している。また散髪は美容師が月1回来所し、本人の希望する髪型になるようにカットしてもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節に合った食材を取り入れたり、チラシを見て頂いたりしている。台拭きや食事の準備、後片付け等でひとりひとりできることを一緒に行っている。刻み食は原型に近い形で刻んで出している。	食事の下ごしらえや野菜切り、配膳、片付けなどが日課になっていて、出来る利用者は毎日続けている。献立はその都度考え、以前の食事のメニューを参考に、旬の食材で栄養バランスのとれたものになるよう工夫している。近所の方が収穫した野菜を届けてくれるので大変助かっている。外食に出掛け楽しむこともある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	あえて献立を作らないため、提供した食事内容の記録をとり、バランスよく栄養摂取ができるようにしている。食べる量や水分量、食事形態はひとりひとりにあわせ、本人の状態に応じて変えている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後ひとりひとりが口腔ケアを行うよう支援している。定期的に口腔内を観察し、しっかり行っているか確認している。		

グループホーム絆

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	介護記録からひとりひとりの排泄パターンを割り出し、職員がそれを把握し適切な誘導を行うようにしている。	出来るだけトイレで排泄できるよう支援しているが、利用者によってはその時の様子で居室のポータブルトイレを使用することもある。布パンツを使用している方、リハビリパンツにパットを使用している方など、それぞれに合ったものを家族に持ってきていただき、記録を基に必要に応じて誘導・支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の予防についての研修を職員に対し行っている。飲食物については野菜や水分を多めに摂取してもらうようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	その日の気分に応じて入浴していただいている。浴室の入り口に『ゆ』のマークの暖簾を下げ、温泉の雰囲気を出している。また、浴室の外を庭園風にし窓ガラスを透明にすることにより入浴を、楽しんでいただけるようにしている。	浴室が2つあり脱衣所はプライバシーに配慮してカーテンで仕切られ、利用者の希望を聞き毎日入浴できるようにしている。間隔が空いた時には職員が誘い入浴している。重度の方もリフトの利用や介助により浴槽で温まっている。浴室の窓から代表者手作りの庭園風景を楽しむことができ、入口に「ゆ」の暖簾を掛け、また、菖蒲やゆず、入浴剤などを入れて温泉気分に入浴できるよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室で休息することを強制せず、必要であれば休息する場所などをかえている。また、消灯時間を設けず、好きな時間に好きな場所で休めるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の基本情報と共に服薬内容と既往歴もわかるファイルを作成し職員が把握できるようにしている。状態に変化があれば、必要に応じ医師に相談し、薬の内容を見直してもらっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	職員と一緒に誕生日会等のイベントの準備をしたり、家庭菜園で野菜を栽培し収穫する際の支援をしている。定期的にミニ旅行をし季節を感じていただいている。事前に渡す「旅のしおり」は日々の楽しみにもなっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	日常的に本人の希望を伺い事業所の周りを散歩している。月に一度花見や紅葉狩り等に出かけ季節を感じていただけるようにしている。	利用者は自分の意向で職員と散歩に出掛け近所の方と交流している。肌で季節を感じていただきたいという思いで、毎月1回は行事外出があり、今年は花見や紅葉狩り、善光寺、バラ園、野尻湖の花火などを見に出掛けた。特に、花見や紅葉狩りは一番良い状態の時を楽しむため職員が何度も下見に行くという。買い物は地元の店に職員が行ったり、知人が来ることのない店を希望する利用者には行事外出の際に買い物するなど、利用者の意向に沿った支援をしている。	

グループホーム絆

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	折込チラシを見ていただいて、希望があれば職員が付き添い買い物にしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	玄関ホールに公衆電話を設置し、希望時電話できるようにしている。手紙のやりとりは常に行えるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は全て東側で朝日が入るようになっている。常に季節ごとの生花や七夕、クリスマス、正月の飾りをしている。複数箇所に温度計を設置、浴室の外は庭園風にするなど、快適な環境となるよう工夫している。	ペンションを改装してあり、1階の食堂の大きな窓から自然豊かな景色を眺めながら食事ができる。2階の機能訓練室には椅子に座ったまま運動ができるよう器具が準備されていた。また高齢者用のカラオケ機器も置いてあり、状況に応じて1階の食堂に移し皆で楽しんでいるという。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間でも一人になれるよう、一人用テーブルやいすを設置したり気の合う利用者同士が同じテーブルになるよう複数のテーブルを設置している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅から本人の家具や食器など使い慣れたものやぬいぐるみや置物や写真等本人の好むものをもってきていただくようにしている。	居室にはガス温風ヒーターが置かれ、ベットや洋服ダンス、使い慣れた椅子やテレビなどが持ち込まれ、思い思いの居室づくりがされていた。家族の写真や本、ぬいぐるみ、仏壇など気持ちが落ち着くような物も並べられていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全に自立歩行ができるよう手すりが途切れる場所には可倒式の手すりを設置し、頭を打つ恐れがある箇所にはクッション材を付いたり、トイレやリビング、居室の場所がわかるような工夫をしている。		